

メリメを通して見た近代日本文学空間のありかた : 漱石、鏡花、三重吉、芥川、堀、三島の場合

高木, 雅恵

<https://doi.org/10.15017/1654607>

出版情報 : 九州大学, 2015, 博士 (比較社会文化), 課程博士
バージョン :
権利関係 : 全文ファイル公表済

氏名	高木 雅恵			
論文名	メリメを通してみた近代日本文学空間のありかた —漱石、鏡花、三重吉、芥川、堀、三島の場合			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	阿尾 安泰
	副査	九州大学	教授	太田 一昭
	副査	九州大学	教授	嶋田 洋一郎
	副査	九州大学	准教授	西野 常夫
	副査	佐賀大学	教授	相野 毅

論文審査の結果の要旨

本論文は、鷗外によってもたらされたフランスの作家、プロスペル・メリメの受容を通して、夏目漱石、泉鏡花、鈴木三重吉、芥川龍之介、堀辰雄、三島由紀夫が、それぞれのありかたで、いかに近代の文学空間を成したかを追求した研究である。

第一章では漱石とメリメについて考察した。近代文学の幕開けにも位置付けられる漱石の『吾輩は猫である』には、西洋の言葉や概念を日本の「近代」に移し替える過程が示されている。漱石がメリメ作品に着目したのは『カルメン』の水浴場面であり、この場面の分析を通じて、西洋における固有の文化が、日本の文化と照らし合わされるときに、いかなる変容をともなうて、作品の中で表現されるかを考察した。そうした探求の中で、メリメの『カルメン』が、多くの点において『吾輩は猫である』の作品構成そのものにも関わっていることが明らかとなった。また、漱石は『吾輩は猫である』において、西田幾多郎に先駆け、禅的世界観を、金沢出身の友、米山保三郎をもとにして、禅師であり哲学者でもある独仙として表現していることも確認した。

第二章では泉鏡花とメリメについて考察した。幻想文学と位置付けられる作品を書く両者が、ファム・ファタルを作品世界に描き出していることから、そうした主題を選択していく背景を分析した。鏡花とメリメは、芸術的モチーフとして水浴の美女を描くにあたって、それをファム・ファタルとして位置づけるという共通した表現方法を採用していた。鏡花とメリメは異なる文化的背景にありながら、追究した問題は等しく、同じような文学空間を志向していた。鏡花とメリメは、文化的背景の違いを越えて、通底し合う文学世界空間を目指す中で、出会うことになったのである。

第三章では、鈴木三重吉におけるメリメ受容について考察した。三重吉が主宰する雑誌『赤い鳥』に掲載された『マテオ・ファルコーネ』には、漱石の解釈につながる立場から、舞台を日本にして原作をそのままの形で置き換えた再話と、原作に忠実でありながらも、作品最終部における死の表現を改変した再話とがある。ただそうした相違にもかかわらず、双方の立場には、死に臨む態度を重視するという共通性が見られる。そうした死をめぐる問題は、メリメが創作において積極的に追い求めた主題のひとつであり、その探求を共有することで、漱石によって近代日本に見出されたメリメが、三重吉によって次なる近代の文学空間に受け継がれることとなった。

第四章では、芥川龍之介と谷崎潤一郎との間で展開された「小説の筋」論争をメリメという視点から分析した。芥川が自らの死の直前に谷崎に送ったメリメの『コロンバ』は「見る」という意識が最も顕れていると考えられる作品であった。「見る」という行為の徹底化とともに作品創作を行おうとする芥川にとって重要なものは、作為的な語りとは異なる「詩的精神」であった。その「詩的精神」こそ、芥川が「小説の筋」論争で明らかにしようとしたものであった。メリメの『コロンバ』

が、そうした中から選択されたものであることを検証した。

第五章は芥川を師と仰いだ堀辰雄におけるメリメの受容について考察した。堀はメリメに通じる「見る」存在であった芥川の目を自らの目とすることで、作品世界を築いていく。「筋のない小説」を志向した芥川の選び取ったメリメを自らの作品の導き手とすることで、堀が芥川の死という空白を乗り越え、作品を生み出したことを示した。

第六章は三島由紀夫とメリメについて考察した。芥川から堀辰雄に受け継がれたメリメに対して、三島が模範的位置を与えて、高く評価していることを明らかにした。三島作品への影響においては、特に『憂国』などに見られるように、メリメが作品中で展開した「死」と「美」の問題が大きいことが確認された。

こうして、近代日本が対峙したメリメを自らの世界に取り込みながら、成長していく文学空間の動的な過程が明らかとなった。本研究において評価すべきは、明治、大正、昭和を通じての長期的な展望の下に、文学空間の大きな運動を分析したことである。そして、その探求においても、諸要素の散漫な羅列に陥ることなく、メリメという共通の分析の枠組みを適用することで、研究における連続性が確保できたと思われる。これまで個々の作家とメリメの関係を論じたものは存在したが、そうした限界を越えて、作家たちをつなぎながら総合的な展望を志向した本論文は、日本近代文学研究において新たな可能性を開いていくことが期待される。

よって、論文調査委員会は、本論文を博士（比較社会文化）の学位を授与するに値すると判断した。